

小犬たち／ボスたち

M・バルガス||リヨサ

鈴木恵子／野谷文昭訳

国書刊行会

ラテンアメリカ文学叢書? 編集—飯直

小犬たち／ボスたち

著者—M・バルガス・リヨサ

訳者—鈴木恵子(すずきけいこ)

野谷文昭(のやふみあき)

定価—二二〇〇円

本書はセイニュウ写真印刷株式会社明和印刷株式会社および大口製本印刷株式会社の三社の協力により一九七八年三月二五日印刷製本され国書刊行会(佐藤今朝夫—東京都豊島区巢鴨三—五—一八電話〇三—九一七—八二八七振替東京五—六五二〇九)により一九七八年三月三〇日その初版第一刷が刊行された。

LOS CACHORROS por Mario Vargas Llosa

©1967 por Mario Vargas Llosa

Derechos exclusivos de la traducción japonesa arreglados con Agencia Literaria Carmen Balcells mediante Japón UNI Agency, Inc.

小犬たち／ボスたち

M・バルガス||リョサ

鈴木恵子／野谷文昭訳

国書刊行会

小犬たち

小犬たち／ボスたち
M・バルガス＝リサ
鈴木恵子／野谷文昭訳
幽書刊行会

本書は、
敷直（法政大学）の編集による
ラテンアメリカ文学叢書の一冊（第七巻）として
刊行された。

小犬たち

セバステイアン・サラサール Ⅱ ポンディ*1の思い出に。

その年はまだ、みな半ズボンをはいていて、ぼくたちはタバコも吸わず、サツカーが何より好きで、波乗りの練習も始めたばかり、やっとアテラサス・クラブVの飛込み台の二番目の板から飛び込めるようになり、腕白で、つるつるとした肌をし、好奇心が強くて、ひどくすばしっこく、がつがつしていた。クエリヤルはその年、シャンパニヤット校に入学したのだった。

ブラザー・レオンシオ、転入生が来るってほんとうですか？ 三年A組、ブラザー？ うん、そうだ、ブラザー・レオンシオは顔にかかった髪を手で乱暴に払いのけ、さあ、もう静かにしなさい。

ある朝、朝礼の時間に、父親に手を引かれて彼が現われた。ロハスよりもチビだったので、ブラザー・ルシオは彼を列の先頭につけたが、ブラザー・レオンシオは教室の後方のぼくたちの間に席を決めた。さあ、君、あの空いている机だ。名前、何ていうんだい？ クエリヤル、君は？ チョート。君は？ チン

*1—現代ペルーの演劇を代表する存在（一九二四—六五年）。首都に生れ、早くからジャーナリズムに関係し、かたわら詩を書いていたが、

のちフランス政府の給費を得て、パリの国立演劇研究所に学ぶ。帰国後、リマ演劇研究会を創立し、演劇の革新をめざし活発に活動する。

『愛すなわち大いなる迷宮』（一九四七年）、『ロディル』（一九五一年）で演劇大賞を獲得、その後多くの悲劇、喜劇、笑劇を書いているが、代表作は、『幸福な島はない』（一九五四年）、『負債を製造する男』（一九六二年）など。

ゴロ。君は？ マニユーコ。君は？ ラロ。ミラフロールス区*1の子かい？ うん、先月から。前はサン・アントニオ街に住んでいたんだけど、今はマリスカル・カステイリヤ街にいるんだ。コリーナ映画館の近くさ。

ガリ勉で——だがご機嫌取りではなかった——最初の週はクラスで五番の成績、次の週は三番だったが、その次の週からはあの事故まで、ずっと主席を通した。勉強を怠け、悪い成績を取るようになったのは、あのことがあってからだ。歴代十四代のインカの名は、クエリヤル？ ブラザー・レオンシオが訊くと、一気にすらすら暗誦してみせ、十戒も、マリスタ修道会*2聖歌の一番から三番までも、ロペス・アルプハル*3の詩「我が旗」も、みなひといき、立て板に水。バツグン、切り札のエース！ とラロ、君、素晴らしい記憶力だね、とブラザー、そしてぼくたちに向っては、君たちも覚えるんだぞ、この悪戯坊主ども！ 上着の襟の折り返しに爪をこすりつけて光らせながら、肩越しにクラス中を眺めて彼は鼻高々（という振りだが、本気で威張っているわけではなく、少し調子に乗ってふざけているだけなのだ。それに仲間としてはいい奴だった。試験のときには答えをそつと教えてくれるし、休み時間にはいつも、おしゃぶり飴やキャラメルをおごってくれ、成金、君はついでるよ、ぼくたち四人の分を全部合わせたより、もっとたくさん小遣いをもたらうんだものなあ、とうらやむチョートに、いい成績を取るご褒美さ。君がいい奴で助かったよ、とぼくたち、憎めない奴だった）。

四時に初等部の授業が終り、四時十分にブラザー・ルシオが終礼を解散させると、四時十五分にはみなサッカー・コートに着いている。カバンや上着、ネクタイを芝生の上にはうり出し、急げ、チンゴロ、早

く早く、他の奴らに占領されないうちにゴール・ポストの下に陣取れ。そして檻の中では、ユダが狂ったように、ワン、尻尾を立てて、ワンワン、牙をむき出し、ワンワンワン、ものすごい勢いで跳び上がり、ワンワンワンワン、金網をゆさぶる。いつか逃げ出しでもしたら、こりやたいへんだね、とチンゴロ、マニューコは、逃げ出したらじっとしていかないといけないんだ、デーン種の犬は、恐がっているな、と思つたときしか噛みつかないのさ。それ、誰がいったんだい？ お父さんさ。ぼくはゴール・ポストによじ登る、そうすれば奴には届かないだろ、とチョート。クエリヤルは、望むところさ、短剣を抜いて、ビュツ、ビュツ、ぶつすり刺してやるゾオーウ、空を見上げて、ウーアーウ、両手を口に当て、アウアウアウアウアー、ターザンの叫び声、どうだい？ 遊んでいられるのも五時になるまで、その時刻になると中等部が引け、上級生たちが有無をいわせずぼくらをコートから追い払うからだ。汗びっしょり、舌を出してはあはあいながら、身体ほこりを払い落とし、本や上着やネクタイを拾い上げると、ぼくらは街へ出る。カバンをボールバスケットのパスの真似をしながらディアゴナル通りを駆け下り、そらパスを回すぞ、おっさん、ラス・デリシアスの所で公園を横切り、ほい、受けたぜ、おぼはん、角の酒屋のハドノフリオVでコーン・カップのアイスクリームを買う。バナナ？ ミックス？ おじさん、もう少し入れてよ、ごまかさないでさ、レモンをもうちよつと、けちけちしないで、いちこのアイス、ちよっぴりおまけしておくれ

*1ーリマ市の高級住宅地区。

*2ー一八一七年にマルセリーノ・ジャンパニャット師によりフランスで創設された宗団で、青少年の教育に力をそそぐ。

*3ーエンリーケ・ロベス・アルプハル(一八七二—一九六六年)はペルーの小説家。『アンデス短編集』等の作品がある。

よ。それからディアゴナル通りをさらに進み、△ジプシー・バイオリンVの前も黙ったまま、ポルタ街でもアイスクリームに夢中で、信号、ペロリ、クリームを舐め、ペロリ、飛び跳ねながらサンニコラス・ビルまで来ると、そこでクエリヤルがさよなら。なあ、まだいいじゃないか、△テラサス・クラブVへ行こうよ、△チーノVにボールを借りるからさ、クラス選抜チームに入りたいんじゃないのかい？ その気なら少しは練習しなくちゃ、来いよ、行こうよ、さあ、六時まででいいからさ、△テラサス・クラブVでミニ・サッカーを一試合やろうよ、クエリヤル。だめなんだ、父さんに止められているんだ、宿題をしなくちゃならないんだ。みんなで彼を家まで送って行き、練習もしないで、どうやってクラスチームに入るつもりなんだい？ 結局はぼくらだけでクラブへ行くのだった。いい奴だけどガリガリ亡者さ、勉強ばかりしていて、スポーツにはちっとも身を入れない、とチョート、するとラロが、あいつのせいじゃないさ、おやじさんがわからず屋なのにきまつてるよ、チンゴロも、そうさ、あいつはぼくたちと一緒に来たくてうずうずしているのに、マニニューコが、チームに入れるのは難かしいだろうな、身体もないし、キックも耐久力もなくて、すぐへたばってしまふしき、いいとこなしだよ。でもヘッディングは上手いよ、とチョート、それにぼくたちのチームのファンだから、どうしても入れてやらなくちゃ、とラロ、チンゴロが、みんなで一緒にいられるようにね、うん、あいつを入れよう、どんなに難かしくてもな、とマニニューコ。

しかし、物事を諦めない性で、何としてでもチームに入りたい一心のクエリヤルは、その夏猛練習し、翌年にはクラスチームのセンターフォワードのポジションを獲得した。《健全な精神は健全な身体に宿る》解ったかね？ とブラザー・アグステイン、スポーツにも優れ、学業にも勤勉ということもその気になれ

ばできるんだ。彼を見習うように。どうやったんだい？ とラロ、あのフェイントモーションや、パス、ボールの追い方や、ゴール隅へのシュートは、一体どこで覚えて来たのさ？ 従兄のチスパスがコーチしてくれたんだ、と彼、それにおやしさんが日曜日ごとに、スタジアムに連れて行ってかれて、そこでスタープレーヤーを見ながら、球さばきを研究したのだそう。納得が行ったかい？ 三ヶ月の間、マチネにも海にも行かず、朝に晩にサッカーを見て、練習して過したのだ。ここに、ふくらはぎに触ってごらんよ、締まってるだろ！ はい、ほんとうに、とても進歩しました、チョートがブラザー・ルシオにいう、身のこなしが素速くて、よく働くフォワードです、攻撃の組立もうまいし、それに何より、どんなときにもフアイトがあつて、とチンゴロがいえば、マニユーコも、敵が攻勢のときはゴール下まで球を追って行くのを見られたでしょう、ブラザー・ルシオ？ あいつをチームに入れるべきです。クエリヤルはうれしそうに笑い、爪に息を吹きかけて、袖が青くて身頃の白い四年A組のアンダーシャツにこすりつけている、これよし、君をチームに入れてやったぞ、でもいい気になつて天狗になつたりするなよ。

七月、ブラザー・アグステインは、学年対抗戦に備えて、四年A組チームが月曜と金曜の週二回、図画と音楽の時間を練習に当てることを許可した。二時間目の休み時間の後、誰もいなくなった中庭が小雨にしっかりと濡れて、真新しいスパイクのようにびかびかに見える頃、選抜チームの十一人イレブンはコートに降り、制服を脱ぎ、サッカーシューズに黒のトレーニングウェア姿で、主将のラロを先頭に一列縦隊で、足取りもきびきびと更衣室を出る。どの教室の窓にもうらやましなければな顔が現われ、冷たい風が吹いていてプールの水面にさざ波の皺をつくり——君、シャワーを浴びるかい？ 試合が済んだらね、今はやめとくよ、プ

ルルル、何て寒いんだろ——彼らの疾走やゴール・キックやペナルティ・キックを盗み見し、学校の黄色い塀の上にのぞいている公園のユーカリや、いちぢくのこんもり茂った枝をゆすり、朝の時間はあつという間に過ぎてしまう。パツチリ練習したな、モウレツ、きつと優勝だぞ、とクエリヤル。一時間後、ブラザー・ルシオが笛を鳴らし、生徒たちが教室を出て学年別に中庭に整列している頃、ぼくたち選抜選手は、それぞれの家へ帰って食事をするために服を着るのだった。だが、クエリヤルはいつも手間取った。練習の後かならず、シャワーを浴びるからだ——何から何までスタープレーヤーの真似かい、とチンゴロ、なにさまだと思っているんだい？ トト・テリー*1にでもなったつもりかい？——時には他の連中もシャワーを使ったが、ワン、その日、ワンワン、ユダが更衣室の戸口に現われたとき、ワンワンワン、シャワーに入っていたのはラロとクエリヤルの二人だけだった。チョートとチンゴロとマニューコは窓から飛び出し、気をつける、ラロは金切り声を上げて逃げ、デーン犬の鼻先であやうくシャワーボックスの扉を閉めることができた。そこでじつとちぢこまったまま、ぶるぶる震えながら、白い床の石とタイル、ちよろちよる流れる水、ユダの吠え声とクエリヤルの泣き声、悲鳴、咆哮、飛びかかる音、ぶつかる音、すべての音、そしてその後はただ犬の吠え声だけになり、それからずつと経って、ほんとうさ、誓ってもいいよ——でも何分ぐらいさ、とチンゴロ、二分ぐらいかい？ もつと。五分ぐらいかい？ とチョート、いや、もつと、もつとずつと後さ——ブラザー・ルシオの大声や、ブラザー・レオンシオの罵る声かして——スペイン語でかい、ラロ？ うん、それにフランス語でも。何ていつてるのか解ったのかい？ いいや、でも声の調子でそのぐらいのこと見当がつくさ、アホ！——何たることだ！ こいつは、ひどい！